ロシア連邦　　派遣期間２０１５年４月～２０１８年３月

在ロシア日本国大使館付属モスクワ日本人学校　実践報告

苫小牧市立明野小学校
教　諭　　秋葉　洋範

１　ロシア連邦について

ロシアは、世界で最も広い国である。面積は約１７１０万平方ｋｍで、世界陸地の約８分の１を占め、日本の面積の約４５倍である。国土の２５パーセントがヨーロッパ、７５パーセントがアジアという割合である。東西の距離は、９０００キロメートルあり、東西時差１０時間（日本とモスクワの時差は６時間）である。

気候は、ツンドラ、タイガ、ステップ、砂漠気候など様々である。人種は、ロシア人やタタール人など、１８０以上の民族で構成されている。人口は約１億４６５２万人、首都モスクワの人口は約１２３３万人である。公用語はロシア語、通貨単位はロシアルーブルである。

２　モスクワ日本人学校の概要、特色ある教育

（１）　概要

１９６７年にモスクワ日本人学校が創立された。ヨーロッパで一番古い日本人学校である。２０１７年には、創立５０周年を迎えた。児童生徒数は、ここ数年、小学部約１００名、中学部は約３０名、計１３０名程度で推移している。校舎は、ロシア政府から借用している５階建ての非常に狭い施設である。例えば、体育館は約１５６㎡、各教室は約５０㎡程度しかない。日本人学校は、校舎の４・５階を借用している。

モスクワ日本人学校　校舎

５階の約半分は体育館で占められており、４校が共有している。特徴的なのは、１階をスウェーデン校とフィンランド校、２・３階をイタリア校、４・５階を日本人学校が使用している点である。そのた

め、グラウンドや体育館などは、各学校と調整し割り当てを決めて使用している。モスクワ日本人学校へ通っている子どもたちの保護者は、大使館、商社、自動車、マスコミ、衣服関係など様々な企業で働いている。一般的に３・４年程度で異動をするので、児童生徒の入れ替わりが多い。

（２） 特色ある教育

学習指導要領に沿った教育課程を基本としているが、モスクワ日本人学校ならではの授業がいくつかある。

１　ロシア語の授業

まずは、ロシア語の授業である。他の日本人学校に通う子と同様に、初めて海外生活をする日本人の子もいれば、ロシアで生まれ育った子、ロシアをはじめ様々な国籍の人種と日本人のハーフの子もいる。それぞれの実力に合わせて、初級・中級・上級の３コースに分かれた授業をしている。転出入が激しく、１年間で約３分の１の児童生徒が入れ替わることや学習の進み具合を考慮して、コース変更は流動的となっている。小１から中３までの全学年で、学年ごとにロシア語の授業が週に１度行われている。また、小学部の児童は、ロシア語の授業で学んだ内容（主に歌が中心）を学習発表会で発表している。

ロシア語授業の様子

２　モス日タイム

次に、「モス日タイム」と呼ばれている小３から中３までの交流学習が週に１・２度行われている内容は、日本のクラブ活動のようなものである。学期ごとに自分の興味がある活動を選択し、異学年と交流を深めながら、技能向上などをしている。このモス日タイムでは、教員はもちろん、空手の指導者（モスクワ在住の日本人）やギターの指導者（ロシア人）などの外部講師の協力を得ながら、活動が続けられている。学習発表会では、毎年、ギター演奏や空手技の発表もされている。

３　英語の授業

３つ目は、英語の授業である。英会話の授業もロシア語同様に小１から行っている。学習形態は、ロシア語の授業と同等であるが、英会話は、２コースに分かれて授業を行っている。教室数も少ないため、ロシア語も英語も図書室や会議室、多目的室なども使用している。

英語授業の様子

４　ロシアを語ろう

４つ目は、中学部の総合的な学習の一環として行われている「ロシアを語ろう」である。一人一人

がロシアで体験したことや調べたことをもとに、自分の主張をまとめ、発表し合う学習である。感性豊かな年代の生徒たちが、日本との生活や文化の違いなどに着目して独自の視点で語り合うのは、非常におもしろい学習である。発表時には、モスクワ大学校内にある日本センターのセンター長が一人一人に対して、コメントを述べてくれるのも励みになる。

5　イチゴ狩り

５つ目は、小学部が勤労奉仕体験の一環として毎年行っている「イチゴ狩り」である。「ソフホーズ・レーニン」という果物農場へ行き、いちご狩り作業をする。「ソフホーズ」とは、旧ソビエト時代に大規模国営農場で、生産から買い取りまで国の計画で行われていたシステムの農場である。「レーニン」は、今から１００年ほど前のロシアの政治家である。それらの名前をとった農場は現在、民営化されている。

イチゴ狩りの様子

ここでのイチゴ狩りは、日本の果物狩りとは少々違う。イチゴを集荷しながら食べることは認められていない。児童は、ひたすら収穫をするのである。収穫したイチゴは一か所に集められ、全体の１割が労働に対する報酬として、日本人学校へ渡される。帰校後、子どもたち一人一人に均等に分配するのもなかなか大変な作業であった。

３　在任中に力を入れてきた教育実践

私が特に力を入れてきた教育実践は二つある。一つは、「異文化理解・交流への取組」である。もう一つは、「インクルーシブ教育」である。

1　異文化理解・交流

～同居校とのつながり～

サッカー交流の様子

初めに、一つ目の異文化理解・交流は、同じ校舎に同居しているスウェーデン校、フィンランド校、イタリア校との合同学習推進である。２０１５年度は、４校合同陸上大会が行われた。各学校の教員で短距離走、走り幅跳び、ボール投げなどの役割分担をし、記録を図った。中でも一番盛り上がったのは、短距離走である。自国の子以外と競走する機会はなかなかないので、どの国の児童も必死に走り、応援しあった。２０１６年は、サッカー大会が行われた。男女混ざってチームを作り、必死に戦ったり、応援したりする様子は、まさにワールドカップのようであった。２０１７年は、ドッジボール大会を行った。スウェーデン校とフィンランド校は生徒数減少のため、イタリア校と交流した。小１から小６までのす

べての年代別で行った。日本人学校の児童は、ドッジボールに慣れ親しんでいるが、イタリア校の児童は、ボールを投げる経験が少ない。そのため、どの学年も日本人学校が勝利したが、イタリア校の児童も投げたり、逃げたりすることを存分に楽しんでいた。子どもたち同士で積極的にコミュニケーションをとるというのは難しいが、校舎内で見かけると互いに顔を見て笑いあう姿も見られるようになった。

また、同居校との関わりについて、余談ではあるが、２０１７年度は、私は担任ではなかったため毎朝校門付近で、登校してくる児童生徒の迎え入れと挨拶をしていた。当然ながら、他校児童も大体同時刻に登校してくる。その子たちにも笑顔で分け隔てなく「Доброе утро.（ロシア語で『おはよう』）」と声をかけてきた。そのうちに他校の子たちも挨拶を返すようになってきた。中には、日本語を覚えて「おはようございます」と言ってくれる子どもたちもでてきた。また、送り迎えをしているイタリア人の保護者も日本語を覚えていき、「こんにちは」「よい１日を」などと言ってくれるようになった。笑顔で挨拶をすることは、人と人とを結びつけることにつながると実感することができた。

～現地校とのつながり～

二つ目の異文化理解・交流については、モスクワ市内の現地校との交流である。モスクワには、日本語教育を取り入れている学校がいくつかある。その中の１校（１４７１番校）と長年交流をしてきた。年に１回ずつ互いの学校を訪問し、それぞれの授業を受けるというものである。ところが、ある年、１４７１番校で日本語を教えている先生が産休に入ったため、交流ができなくなった。そのため、日本人学校の現地スタッフの協力を得ながら、日本人学校と交流してくれる学校を探すことになった。

ロシア現地校の給食（朝食）

ようやく一つの学校が交流の意思があるという返事をくれたため、事前に連絡を取り合い、訪問し、打ち合わせを行って、何とか交流できるようになった。新しく交流が始まった現地校（１２３９番校）は、ロシアの給食（朝食と昼食があるが、交流時間の都合上朝食の方）も日本人学校の子どもたちに食べさせてくれることになった。互いの授業を体験する伝統が途切れることなく、さらに給食まで食べることができ、とても貴重な経験になった。ロシアの子どもたちに人気だったのが、小学部の高学年が企画した「おにぎり作りと試食」である。ロシアでおにぎりを見かけることはほとんどないので、みんな喜んで食べていた。また、日本のアニメに興味をもっている子たちも多く、日本人学校の児童がアニメのプレゼンをして、知っているキャラクターが出てくると、大変盛り上がっていた。豆まきや福笑いなどの日本文化も興味をもって共に活動することができた。反対に、日本人が驚いたのは、「チェス」「伝統的な踊り」の授業があることである。

ロシア伝統的な踊り体験の様子

習字体験の様子

学校ごとにカリキュラムが違うのだが、ロシアに踊りやチェスが根付いているのを実感することができた。

2　インクルーシブ教育

次に、二つ目のインクルーシブ教育についてである。日本人学校小学部に編入してきた子どもたちの中には、学習において困り感を抱える子もいる。在外施設は教員数も少なく、専門的な資格や知識をもった教員もいなかったので、多くの教員も保護者も不安を感じていた。そんな中、私は、２０１６年度に小学部３年生の担任になった。当初は大変な状況であったが、次第に共に学び合える関係へと変容していった。

大きな要因は、やはり子どもたちの力である。もともと、モスクワ日本人学校は転出入が多い。１年間でクラスの約３分の１が入れ替わる程である。また、当然ながら様々な国のハーフの子たちもたくさんいる。ドキドキして日本や他国からモスクワにくる子、日本語がさっぱり話せない子などがいるのが当然なので、新しい仲間を受け入れる素地がある。また、少ない人数の学校なので、年齢に関係なく縦のつながりが強い。上の学年の子が下の学年をそっとサポートしたり、下の学年の子がその姿を見て、自然と周りに配慮したりという関係がある。子どもたちが安心して過ごせる人間関係が学校全体に浸透していたのが、うまくいった要因だと考えている。

はじめ該当児童の保護者も児童補助のため、登校を希望し、授業の様子を見て、支援することもあった。しかし、時間が経つにつれて、子ども同士で学び合う姿が増えていくことを実感していった児童が学校でできることとできないこと、学校が児童にできることとできないことを共通理解することもできた。そして、学期ごとや年度末にどこまでできるようになれば良いのかという具体的な目標も保護者と共に立てることができた。

また、細やかに学校や家の様子を連絡し合うことで、保護者も安心して子どもだけで登校させるようになった。保護者自らが学級懇談会や学期始めに、我が子の障害や様子についてクラスの保護者に伝えていったことも好影響し、温かい目で見守られたのも大変良かった。空き時間のある教員には積極的に授業の補助に入ってもらい、支援してもらえる校内体制も進めることができた。教科や単元によって、別課題を用意し、取り組ませることもあった。別課題も他学年の担任の協力をもらいながら、必要なものを用意することができた。担任だけに任せきりにしない、校内連携ができたのは大きな成果だった。

授業の様子

どのような成長を願うのかを該当保護者と学校が共に目標を設定し連絡を取り合うこと、現状を周りの保護者にも分かってもらうこと、学校の方針を伝えることなどがうまく絡み合い、温かい心をもった子どもたちに成長していったように感じている。

４　モスクワの生活全般にかかわって

モスクワは、一般的に旅行などで訪れることが少なく、暮らしぶりなどもあまり知られていない場所だといえる。そこで、日本と比較しながら、慣れてくると意外と快適な面もある「交通」「物価」「食べ物」「文化」「住環境」について紹介していく。

モスクワ地下鉄構内

まずは、「交通」についてである。クレムリンを中心に交通網が発達した大都市である。車で移動する場合、左折や右折のルールが複雑で面倒である。決められた場所でしか曲がれないため、目の前にスーパーがあってもかなり遠回りしないといけないことがよくある。また、事故が起きた場合、車をその場から動かしてはいけないため、大渋滞が発生する。国内外の要人が移動する際、一般道を要人専用道路とし、一般車は走ることができない。それも渋滞の要因となっている。

また、オービスや監視カメラがたくさんある。市の中心部へ近づくほどたくさん見かける。１キロメートルごとに設置されているくらいあり、数えきれない。

一方、便利なのはメトロと呼ばれる地下鉄が発達していることである。モスクワには２００以上ものメトロの駅があり、待ち時間が１～２分程度で次の電車がやってくる。さらに１回利用する料金は、2018 年 3 月の時点で 80 円程度（どこまで乗っても同一料金）と格安であった。駅構内のデザインは、すべて異なりとても美しいデザインとなっている。

スーパーのウオッカ売り場

次に「物価」についてである。スーパーでの値段が年々値上がりしているが、日本と同程度であった。すべての商品に１８％の税金が含まれている。店や品物によっても値段が大きく異なるのであるが、一般的に日本よりも価格が安いものは、果物、パン、ウオッカ ビール、ガソリン、スマホの SIM、映画などである。日本よりも高いものは、衣料品、靴、鞄、電化製品、外食などである。

３つ目に「食べ物」についてである。主食は、「ブリヌイ」と呼ばれるクレープのようなものにキノコやサーモン、ニシンなどを巻いて食べるもの、ソバの実を炊いたもの、ジャガイモ、おかゆ、パンなどである。パンは、黒パンと言ってライ麦で作られた少し酸味のあるものがよく食べられている。

また、「ボルシチ」と呼ばれるビーツを主材料とした赤いスープ、キノコのスープ、魚のスープ、野菜のスープなどスープの種類が豊富である。

ロシアでよく食べられる　ボルシチ

サラダは、「オリビエサラダ」というものがよく食べられている。ジャガイモやニンジンなどの野菜を賽の目状に切り、マヨネーズであえたものである。お正月の定番料理でもある。

飲料類では、「ウオッカ」が有名であり、非常にたくさんの種類が安く売られている。近年、健康面などを考え、ウオッカを飲む人は減ってきているようである。そのかわり、若者を中心にビールやワイン、カクテルなどがよく好まれている。ジュース系では黒パンを発酵させた「クバス」クランベリーから作った「モルス」などもおいしい。

４つ目に「文化」についてである。様々な芸術が発展している国である。特に日本でも知られているのは、バレエ、サーカス、スケートなどである。

バレエは、ロシア出身の作曲家であるチャイコフスキーが作曲した「くるみ割り人形」「白鳥の湖」「眠れる森の美女」が有名で人気がある。どの公演も常に満席になる程である。バレエは、舞台下でオーケストラが生演奏し、それに合わせてダンサーが躍って物語を表現する舞台である。モスクワ市内にもいくつも劇場があり、それぞれで演出も異なる。演目は、通常２時間以上かかり、途中で休憩が２０～３０分程度入る。演目が終了すると、たくさんの観客がバレリーナや演奏家に花束を渡しに行く。観客の多くは、ドレスを着るなど正装をしている。

バレエの劇場内

サーカスもモスクワ市内にいくつかあり、それぞれが特徴のある出し物をしている。とくに有名なのはニクーリンサーカスとボリショイサーカスである。ニクーリンサーカスは、いろいろな種類の動物が出てくるのが特徴である。猛獣を自在に扱う様子は圧巻である。ボリショイサーカスは、様々なストーリーをもち、年に数回演目を変えている。人間離れした技の中に笑いがあり、大変面白い。どちらも大人気で、バレエ同様常に満席になる。開演前に顔にピエロや動物風のペイントをしてもらう子たちも多い。

サーカスの様子

スケートは大変盛んで、大型ショッピングセンターには、通年営業のスケートリンクがある。どの

スケート場の様子

リンクも指導料を払うと個人レッスンしてくれる。冬季になると市内に千以上ものスケートリンクが作られる。ほとんどが無料で使用できる。また、大きな公園にいくとそのほとんどの道がスケート場となっている。一周すると数キロにもなるところもあり、大変にぎわっている。スケート靴を履いたまま立ち寄れるハンバーガーやコーヒーを売る店、トイレなども設置されており、便利である。小さな子どもから老人まですいすいと滑っている姿を見ると、

ロシアにスケート文化が根付いていることを強く感じることができた。

５つ目に「住環境」についてである。モスクワ市内では一軒家を見かけることはない。ほとんどの人たちは「ドーム」と呼ばれるアパートやマンションなどに住んでいる。モスクワ市内は土地代が非常に高いためである。何十年も前に建築された建物もたくさんあり、そこに住んでいる人も多い。

寒い国なので、すべてのドームに暖房設備がついている。面白いのは、各部屋で暖房の調節をすることができない点である。国が暖房を管理し、特定の気温条件になると暖房がついたり消えたりする例年暖房がつくのは１０月中旬で消えるのが５月初めである。その間は２４時間暖房が入り続けている。暖房方法は、各部屋の暖房器具にお湯が流れるシステムである。暖房が入っている期間は、室内はとても暖かい。真冬でも室内が暑くて窓を開けることさえある。反対に、暖房が切れたり、ついたりする頃は、かなり寒く感じることもあり、室内でコートを着て過ごすという話を聞いたこともあった。暖房以外にも、室内で使うお湯も国に管理されている。毎年、５月中旬頃から日常生活で使う各家庭のお湯が止まり、点検作業が行われる。そのため、その期間は水シャワーで過ごさなければならないのもロシアならではである。

市内の一軒家はほぼ見当たらないが、モスクワ郊外へ行くと「ダーチャ」がある。「ダーチャ」とは、旧ソ連時代に食料を自給できるようにと、政府が国民へ配給した土地に建てた一戸建ての別荘である。手造りの建物も多い。夏場は、週末になるとモスクワ市民はダーチャへ行き、畑作業をしたりキノコ狩りをしたり、バーベキューをしたりなどして過ごしている。週末の郊外行きの道は渋滞する反対に、市内は交通量が減り、自動車の運転がしやすくなる。

モスクワ市内の住宅　～集合住宅ばかりである～

5　終わりに

今回の赴任にかかわって、モスクワでの生活を含め、渡航前から現在に至るまで、多くの方に支えられているのを痛感した。私や私の家族の人生において、大切で貴重な３年間となった。出発前に多

くの方から激励されたこと、モスクワ渡航後には在露中の日本人の方たちはもちろん、ロシア人の方々、在露中の他国の方々の支えがなければ、現在の自分は存在しない。皆さんへの感謝の思いしかない。

これから、私にできることは、年齢や性別、人種などに関係なく、相手のためにできることがあれば進んで行動していくことだと考えている。日本人は、ロシアやロシア人に対して、あまり良い印象をもっていない印象を受ける。しかし、実際にはロシア人は、日本人や日本文化を尊重している人が多く、親日的である。それを肌で感じたからこそ、少しでも日ロの懸け橋となれるよう、また、人と人の気持ちのつながりに国境は関係ないことを広く伝えられるよう、在外施設での経験を今後の教育活動や生活に活かしていければと考えている。